立冬

地森映子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
立冬

【Ｎコード】
Ｎ５６５９Ｏ

【作者名】
地森映子

【あらすじ】
真野利奈は総合商社に勤める普通のＯＬ、晃一郎は大企業グループの御曹司。
そんな二人の別れと、再会の物語。
ハッピーエンドになる予定です。

あの時・・・
誠実に接してくれてさえいたら、

心はもっと楽になれたかな・・・・

あの時・・・
酷いことをしてしまった、
後悔しても仕方ないけれど・・・・

登場人物紹介（前書き）

登場人物が増えるたびに更新します。

登場人物紹介

＊真野（まの）　利奈（りな）　３０歳　Ａ型

大手総合商社、二階堂商事に勤めるＯＬ。
ポヤっとした雰囲気のため、年齢は若く見られがち。
晃一郎を深く愛しているが、
前を向いて生きていける芯の強い女性。
手切れ金の６００万のため、悩み中。。
・・・手切れ金にも納税は必要なのか・・・？？？

趣味：ゴルフ／ネイルアート（される方）／美味しいものハント／プロ野球観戦（ドラ吉）

＊神宮寺（じんぐうじ）　晃一郎（こういちろう）　３４歳　Ａ型

元利奈の上司で恋人だった人物。
多くの会社を束ねる企業グループ、神宮寺ホールディングスの御曹司。
現在は、表向き神宮寺家を束ねる父である健史の秘書を勤めている。
作中、へたれで書かれていますが、
実際は、目的のためなら手段を選ばない、冷徹な人物でエリートを絵に描いたような人。
しかし、祖父である達一郎には逆らえない。
利奈のことを心から愛している。

趣味：ゴルフ／プロ野球観戦（利奈の影響）

心を殺して（前書き）

短編としてあげています作品と全く同じものになります。

心を殺して

今日は、秋の気配が消えて、
１１月初旬だというのに、真冬のように寒い日だった。
利奈は毎月１回通っているネイルサロンで、
出迎えた担当ネイルストの女性にコートを渡し、
「利奈さんこんばんは、今日一日寒かったですね」
「そうそう３０歳にもなると、突然の寒さには順応できないのね」
笑いながら他愛もない話をしていた。
実際の心の中は、
深い悲しみで沈んでしまうのではないかとい状態なのだ。
「今月は早めの来店ですね。まだ2週間ちょっとしかたっていないですよ？デザインが気に入らなかったですか？」
利奈は苦笑いしながら、
「違うのよ、気分転換したかっただけなの」
今まで利奈はきっちり4週で来店していたので、
ネイリストはやや驚いたようだったが、自分の落ち度ではないと知ると、
安心したように、
「今回はどのようになさいます？　気分転換に明るめのお色にしま

す？」

ジェルネイルは一般的なマニキュアなどに比べると高価ではあるが、
一ヶ月程度長持ちするので、
最近のネイルサロンではジェルネイルが主流になりつつあった。
しかし毎月通っていると、
デザインを考えるのも億劫になってきて、
シンプルなものを注文するというのが、大抵の女性の傾向だ。
利奈もその傾向から外れず、
最近では、すべての人間に受け入れられるような、
エレガントではあるが、シンプルなネイルを注文するようになっていた。

「今回は綺麗目のおとなしいピンクのカラーでグラデーションにしてください・・でもシンプル過ぎて気分転換にならないかな？」

ネイリストは「かしこまりました、また一段とシンプルですが、気分転換になるように綺麗に仕上げますね」と、
笑顔で作業に入った。

「利奈さん、今日はなんだか元気がないですね、どうかされました？」

やはり隠しているつもりでも、
顔にでてしまうのかと、自分に呆れながら、
だんだん除去されていく、自分のネイルを見入っていた。

「元気なんだけど・・・」

と言葉を濁した。

ネイリストも心得たもので、
それ以上は何も聞かなかった。

ジェルネイルの除去は、
通常の除光液では落とせないので、
自分の爪の健康のためにもネイルサロンでおこなうようにしていた。
特別な薬品をしみ込ませたコットンを爪に乗せ、銀色のホイルで指をまく、
自分の指を見ながら、
利奈は感傷に浸っていた。

利奈にはネイルサロンに行き始めた頃の、
二年前に告白され付き合いだした、
晃一郎という彼氏がいた。
利奈の勤める商社の中でも、出世頭で女子社員のなかでも一番人気だったし、利奈も憧れていた。
そんな彼から告白され、どんな幸せが自分に舞い降りたのかと思ったものだ。
彼とは仕事に支障をきたさないよう、
同僚には秘密にしながら逢瀬を重ねていたが、

いつかは結婚できるもの・・・いや近いうちに結婚できるもの、
愛し愛されているもの、

利奈は信じて疑っていなかった。

先月、

「話があるんだ」

と彼のマンションに呼び出され、

『改まってなんだろう・・・何の記念日でもないし、でも・・・もしかしてプロポーズかな♪』

と利奈はウキウキしながら、
一階のエントランスで彼の最上階にある部屋番号のインターンフォンを押した。
エントランスに入ると、
マンション専属のコンシュルジュに慇懃な笑顔で出迎えられた。
今考えれば、立地的にもマンションのグレード的にも、
一介のサラリーマンが住めるような所ではないと、
思い至らなかった自分が不思議だったものだ、考えていた。

部屋に着くと、
晃一郎に出迎えられ、
勝手知ったるリビングに向かうと、
一人の見知らぬ男性が厳しい顔をして二人を出迎えた。

「話ってなあに？」

と晃一郎に尋ねた。
しかし彼の口からは、何も発せられず、
代わりに弁護士だと名乗る、因幡という男から、
利奈を絶望に追いやる言葉が襲ったのだった。

因幡は淡々と、
晃一郎は日本有数の企業グループの御曹司であること、
現在勤める会社は修行目的で出されていたこと、
今月中に一族の会社に戻るため、会社を退職すること。

半年後に幼いころからの婚約者の女性と結婚すること、
利奈とはもちろん別れなければならないこと、
手切れ金のこと、
手切れ金を受け取った後の誓約書のこと、

因幡は冷たく言い放った。

呆然とした。
そのときは何も考えられないようで、
でも、愛する晃一郎にすがったり、泣き叫んだりできないかった。
一言だけ、目は晃一郎を見据え、

「私は二年もの間、晃一郎さんの何をみていたんだろう」

と言うと、晃一郎は、なおも黙っているので、

「でも同じだね、晃一郎さんも、私のことを手切れ金をうけとるような女だと思ってるのだから・・
何も見てなかったね」

堰き止めていた涙があふれるようこぼれた。

「手切れ金なんていらないよ・・でも、その誓約書ってのは書くから安心して・・・・・ふふ・・」

と乾いた笑い声をだした。

「どこに何を書けばいいのでしょう？　言われたまま書きます。」

晃一郎は最後まで、

何も言わずに、
振り返らず部屋を後にする利奈を見ていた。

利奈は自分がどのように自分の部屋に帰りついたか覚えていない、
いつの間にか寝ていて、
翌朝、いつものように起きてみると、
昨夜のことは事実なのだと、
また涙がこぼれた。
しかし、日常は襲ってくるもので、
会社には普通に出勤し、
退職する、晃一郎の引継ぎも、
残る社員から贈られる記念品のカンパも、
送別会への参加も、他の同僚と同じ用に行った。
悲しみを隠すというより、何も考えないようにするという日々だった。

先月から今日までの日々を思い出しながら、
自分のネイルが仕上がっていく様を眺めていた。
清楚な美しいピンクだ。

「３０歳でもこんな可愛い色大丈夫かな？」

とふざけて言ってみたら。

「利奈さんは、２３歳くらいにしか見えませんよ」

とあからさまなお世辞を言ってくれた。

「２３歳は言い過ぎじゃないない？せめて２８歳くらいにしてくれたら、真実味があるのに」

と笑ったのだった。
施されたネイルを見ると、
案外気分転換にはなったものだ。
お礼を言って、ネイルサロンを後にした。

手切れ金は不要だと言ったのに、
昨日、利奈の口座に６００万円振り込まれていたので、
弁護士の因幡に連絡をとると、

「不要でも受け取っていただかないと困るのです」

押し切られてしまった。
もう何もかもどうでもよかったし、これ以上思い出したくもなかったので、

「では、そちらも同じでしょうけど、私も、もう係わり合いになりたくないので、これ以上は何もしないでください」

念を押して電話を切った。

吹っ切れた？
そんなことあるわけがない。
心を殺しているだけなのだ。
何も根拠のない、何かで自分を支えている。

まだ先のことはわからないけれど、
しばらくは、このままでいたいと、
ぼんやり思った利奈だった。

心を殺して（後書き）

晃一郎・・・へたれですね。
仕事できるエリートとして書きたいのに。。。

愛しい人（前書き）

あの時・・・
誠実に接してくれてさえいたら、
心はもっと楽になれたかな・・・

あの時・・・
酷いことをしてしまった、
後悔しても仕方ないけれど・・・

愛しい人

晃一郎が最初に彼女を意識したのは、
美しい手をしているなと思ったことだった。
ネイルアートが施されているけれど、
華美過ぎず、白く細い手に映えて、
優雅だと感じた。

手が気になったら、全体的に気になりだした。
肌は白くきめ細かい。
髪はロングヘアで茶髪にしているが、
艶があった。
もう３０歳近いと聞いたが、
若く見えるなと思ったし、
仕事も丁寧で、
海外ともやり取りが多い金属事業部において、
様々なクライアントからも社内でも評判が良かった。

自分の気持ちを抑えきれなかった晃一郎は、
唐突ではあったが、素直に気持ちを伝えた。
その時の彼女の美しい嬉しそうな笑顔は今でも忘れることが出来ない。

一緒に食事をして、美味しいものを食べた時の幸せそうな顔。
お互い激しく求め合って、絶頂の時を迎えた、艶かしくも掠れた声。
彼女は朝に弱いのでいつも先に起きると、横で寝ている微かな寝息。
仕事中、ぽやっとしている自分を必死で隠そうと、可愛く無理している彼女。

思い出したらきりがないけれど・・・・
全てが愛しい。
この幸せだった2年という日々を、
自分はぶち壊してしまったと感じていた。
せめて、思い出だけでも美しくできなかったものか。
それは出来ない・・・。
愛しいが故、恨まれたほうが良いと思った。
今年の春に一族の長で祖父である、達一郎主催の花見会があり、
祖父の唯一の娘である気弱な母に、
「必ず出席するように」
に言い含められて、しぶしぶ参加した。
達一郎は晃一郎をみて、目を細めながら言った。
「おまえも34歳だ、もう身を固めてはどうか、佐伯の娘は大学を卒業したようだ、そろそろいい頃だろう。佐伯も異存はないようだ」
「しかし・・・」
「一時的な感傷は身を滅ぼすものだ。忘れることだ、解っているな」
容赦のない言葉だった。
優しげな声音ではあるが、一族の者であれば、皆すくみ上がるだろう。
最後に、

「会社も辞めて戻って来い、いいな」

とだけ言うと、
来賓の輪の中に戻っていった。
晃一郎は呆然と祖父の背中を見つめるしか出来なかったのだ。

数日後、
達一郎の息のかかった、
一族の顧問弁護士、因幡が来て、
利奈のことは全て把握していて、別れるよう祖父が望んでいると伝えてきた。
因幡は、

「御前が全てを把握していらっしゃるということが、どういうことか晃一郎様ならばお解りですね」

と言った。
達一郎ならば、何をするか解ったものではない。
容赦なく、冷たい言葉で利奈を呼び出すよう言われ、
利奈に今夜マンションに来るよう伝えた。
電話の向こうの利奈は、晃一郎に愛しい声で、

「わかったわ、何か買っていく？」

と尋ね、
晃一郎は、

「いや・・・いらないよ待っている」

と伝えた、恐らく愛しい優しげな声で、
自分に語りかけてくれるのは最後であろうと思った。

利奈がマンションに来たので、
ドアを開けて迎えると、
恐らくこれが最後になるであろう、
自分に対する、笑顔を心に刻んだのだった。

「話ってなあに？」

と尋ねた利奈に、
晃一郎は何も言わなかった、
いや、言えなかったのだった。
口を開けば、

「違うんだ！！！」

と叫びだしてしまいそうだったからだ。
因幡が利奈に全てを伝えると、
利奈はうつろな顔で、

「私は二年もの間、晃一郎さんの何をみていたんだろう」

と言った。
愕然として、またしても何も言えなかった。
そんな晃一郎に失望して、利奈は、

「でも同じだね、晃一郎さんも、私のことを手切れ金を受け取るような女だと思ってるのだから・・
何も見てなかったね」

涙をあふれさせた、利奈を見つめているだけで精一杯だったのだ。
あれから、仕事の引継ぎや、送別会で顔を合わせることもあったが、
事務的な態度だけで、
利奈は何も言わなかったし、
晃一郎の顔を見ようともしなかった。
職場の人間は晃一郎と利奈との間にそんな壮絶なやり取りがあった
などと、
気づいているものは皆無であろう。

しかし晃一郎には解っていた。
利奈の心の叫びが、
「どうして・・・」
と繰り返し、晃一郎に問いかけていた。

「ごめん、利奈、ごめん、本当に情けない自分だと解っているんだ。
心から君だけを愛しているよ。」

目の前には、
婚約者の奈津葉が、明るい声で、
「婚約披露パーティーはやはりお着物の方がよろしいかしら？」
などと、はしゃいでいる。
晃一郎は、

「どちらでも」

と一見優しく、気のない返事をしたのだった。

愛しい人（後書き）

つたない文章で申し訳ありません。
誤字がありましたら、お知らせください。

電話番号変更（前書き）

未練をたちきるのは、
時間が必要なのか・・
それとも覚悟なのか・・

電話番号変更

利奈は、ある休日の朝、
最寄の携帯ショップに来ていた、
といっても、
機種変更をするわけではなく、
電話番号を変更してしまおうと思ったのだ、
晃一郎への未練をたちきる一歩を踏み出すために・・・。

メールや電話を受けないだけならば、
「着信拒否」をすればいいだけだったのだが、
拒否をしても、もし晃一郎から電話があれば、
着信に残り、自分の心をかき乱すだろうと考えたからだ。

ショップ店員に、カウンターに促され、

「電話番号の変更をしたいのですが・・」

「かしこまりました、どのような理由で電話番号の変更が必要か伺ってもよろしいでしょうか」

「いたずら電話が多いんです」

嘘ではなかった、以前から無言電話などに悩まされてきたため、
携帯会社に勤める友人に相談したところ、
解約したくないのであれば、「電話番号変更」ということが可能と聞いていたのだ。

「左様でございますか、電話番号変更は今回一回限りのお受付となり、電話番号を選んでいただくことは出来ませんがよろしいでしょうか？」

「はい、かまいません」

「電話番号変更が完了いたしますと、メールアドレスの自動的に変更されますが、こちらはお客様自身で元のメールアドレスに戻していただくことが可能です」

説明を聞きながら、
アドレスも別のものに変えてしまおうと、考えていた。

携帯ショップでの電話番号変更が完了し、
デパートの地下に寄って、
お昼用にお惣菜を購入し帰宅した。

昼食をしながら、
一部の友人に電話番号とメールアドレスを変更したことをメールした。
メールをすると、友人達が、
「久しぶり～。変更承りました！　また今度ランチか飲み会でもしよ～」
などと、明るいメールが続々と届き、
心が和んだ。

晃一郎とは共通の友人もいなかったし、
お互いの友人を紹介したりすることがなかったため、
新しい番号が知られることは無いと安心したが。
そもそも、

もう必要の無い番号だと、
アドレスから消してしまっているかもしれないなと考えなおし、
この、変更は自分の心を切り替えるためなんだと、
自分の弱い心に対して強く言い聞かせた。

それでも、
二年も付き合ってきて、
共通の友人もいないし、
お互いの友人も紹介する機会が一度も無かったなんて、
なんて希薄な関係だったのだろうと、
別れて、初めて気づいた利奈だった。

電話番号変更（後書き）

なんか意味のないことをしてしまう・・・
私も同じです。。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5659o/

立冬

2010年11月2日14時26分発行